外からの眼
アルゼンチンのゴンブローヴィッチ

フアン・ホセ・サエール[1]
久野 量一　訳

ポーランド人であること。フランス人であること。アルゼンチン人であること。言語の選択を別にして、それ以外にどのような意味で、作家に自己定義を求めることができるだろうか？　コミュニストであること。リベラルであること。個人主義者であること。文章を書く人にとって、そうしたラベルを引き受けることは、その仕事の特性からみると、サッカークラブのソシオになることや、美食同好会のメンバーになるよりも価値が高いというわけではない。社会的想像力の役割配分のなかで明確に定義された者として認知される可能性をもつこと、それは人間の特権ではあるが、作家のそれではない。というのは、人間という概念そのものが、もはや効力のない美であるかのように、フィクション作家が撤廃しなければならない最初のフィクションなのだから。守るべきものをもたぬという確信、これが作家を導き支配し、そしてまた、彼の仕事を最終的に正当化するのである。

作家はア・プリオリには何者でもなく、誰でもない。この状況は、形而上学的に考えれば、実際のところ彼と異なる他の人たちとなんら変わるところはないが、作家であるという細部は、全人生を変えるにじゅうぶんなほど決定的な重みをもつのである――かりに他の人たちにとって存在を作り上げることが、さまざまな社会的イメージという内容物をもちいてその空白を埋めることにあるとするなら、作家にとって大切なのは、その空白をそのままにしておくことである。彼の仕事の緊張は次のようなものに要約されるだろう。誰でもなく、何者でもなく、ゼロから世界に挑むこと。そして、作家の手にするその戦略がまさしく、芸術家は日ごとに自分の戦略を見直さなければならないということを定めているのである。これがゴンブローヴィッチから真に学ぶべきことであって、よく彼について言われる、行き過ぎの個人主義ではない。「彼の思考は」――『日記』のとある個所でゴンブローヴィッチはカミュのことを引き合いにだして言っている――「個人主義すぎる、抽象的すぎる」。そしてもう数行下で、「自覚？　かりにぼくに自覚があったとして、ぼくのなかのすべてと同じで、むしろ半自覚、〈自覚のようなもの〉だ。ちゃんと目を開けてモノを見るなんてやったことがない。ぼくは軽薄だ。ぼくは変幻自在だ」。

ゴンブローヴィッチの例の未成熟が意味するところとは、前もって与えられる実体をす

べて拒むことである。『フェルディドゥルケ』や『トランス＝アトランティック』の登場人物はしきりに、自分自身（田舎の秀才、現代的な女学生、ポーランド愛国主義者）の抽象的なイメージと一致しようと望んでいる。そして、『ポルノグラフィア』のやや年老いた大人たちは、若さ――すなわち不確定さ――の気高い力を前に、不安でおびえている。誰かであるとき、何者かであるとき、自己という不明瞭な存在を抽象なるものにあわせようと戦っているうちに、人はアーキタイプ、カリカチュアに陥る恐れがある。『トランス＝アトランティック』の同性愛者はただ「プート Puto」と呼ばれている。ポーランド語でもフランス語でもこの単語は何も意味しない。しかしスペイン語ではまさにそれ、つまり同性愛者のことを指す――この人物のばかげたところ、そして痛ましさは、その名前が含む定義、つまり「おかま」という意味に彼が絶え間なくあわせようとする振る舞いから生まれるのである。『フェルディドゥルケ』の〈現代的な女学生〉は絶えず現代的な人物として服を着て話を進め、行動する。こうして彼女は、自分がそうだと信じている〈現代的な女学生〉だとみずから名乗るようになるわけだ。もしわたしたちが誰かを、皮肉をこめてステレオタイプ――たとえば〈田舎作家〉、〈編集者〉、〈美人〉――で呼んでいると、肩書がひとり歩きしだして、いつのまにか彼らについて抱く幻想が肩書を飲み込んでしまうのがわかるだろう。実体であろうとしすぎると――ドン・ジョバンニやファウスト、そしてトリスタンとイゾルデも――、オペラの登場人物たちは、むしろオペレッタのなかでさまようことになるのである。

いかにも芸術家らしい計画的ともいえる自己を定めぬその姿勢が、ゴンブローヴィッチにまつわる矛盾の多くを説明してくれる。彼が自分を伯爵だと言っていたことや、すぐに嘘だとばれるごまかしばかりをしていた一連の奇行や気まぐれにも納得がいく。それもこれも、彼がとりわけポーランド時代からの知り合いや、嘘だと知っている人たちの前でわざわざそうしていたのを知ればなおのことである。ある意味で、個人的アイデンティティをめぐる究極の気まぐれは、伯爵として通す試みのことかもしれない。もし芸術家がどんなものであれ外向けの態度を引き受けなければならないのなら、それはいずれにしろ偽りのもの、少なくとも誇張された嘘、明らかに架空のものであるはずだ。これは聞き手の懐疑主義的態度に対し敬意を払っている行為とも言える。またこれは、ヨアヒム・ウンゼルトが「悲観的論法」と呼んでいる、カフカの編集者との付き合い方にもどこか似ている――カフカはこう言った、わたしの本を出版すると決心してくれてたいへん満足しているが、もしもわたしなら拒否しただろう。ゴンブローヴィッチはこう言った、ぼくはポーランドの伯爵として通すけれど、ぼくが偶然の風に運ばれてこの国に置き去りにされた哀れな悪魔にすぎぬということをあなたが知っているのをぼくは気づいている。

その風がアルゼンチンのわたしたちのところに彼を運んでくれた――以降、彼を永遠に

ブエノスアイレスの文学的フォークロアと結びつけた奇跡的な偶然と言えよう。ある意味で、彼は自分を受け入れる準備の整った環境に舞い降りた。なぜか。ひとつめの理由は、アルゼンチンの歴史的現実が祖国喪失者や移民、逃亡者、見捨てられた人たちによって構成されていたからだ。もうひとつは、ラプラタ文学――〈純文学〉であれ〈大衆文学〉であれ――を書いた人たちの多くは、不確かな場所で船に乗りここまでやってきて、元の土地へ運んでくれる幻の船を待っているうちにずるずると滞在が長引いた人たちだったからだ。周知のことだが、到着してから数日後、あと少しでゴンブローヴィッチは自分を乗せた船でヨーロッパに戻るところだった。トランクを抱えて乗船したが、出港を知らせる汽笛が鳴ったときに下船したのである――皮肉なことに、次の船はほぼ二十四年後に出港することになる。リカルド・ピグリア [2]はゴンブローヴィッチについてこう言っている。二〇世紀でいちばん優れたアルゼンチン作家はヴィトルド・ゴンブローヴィッチである、と。このことで彼はある新聞で先ごろ批判されたのだが、このピグリアの言い方はもちろんアルゼンチンのナショナリズムを試すための皮肉に満ちた強調表現である。しかしあながち見当はずれというわけでもない。ゴンブローヴィッチの主題、とりわけ未成熟、未完成性というのは――ゴンブローヴィッチはこれをポーランド文化特有のものと考えているが――まちがいなく一九二〇年代からアルゼンチンの知識人が抱いていた重要な懸念であった。そしてゴンブローヴィッチはアルゼンチンの社会的現実のなかに――ある場合には鋭い洞察力をもって――彼の好きなテーマがさまざまな形であらわれているのを観察していたのだった。

しかしこのことは、彼のアルゼンチンとのかかわりのほんの一面にすぎない。もうひとつ指摘するに値するのは以下のことである。わたしたちの文学の大半は――その起源から、しかしとりわけ十九世紀と二〇世紀初頭――外国の言葉、たとえばドイツ語、英語、フランス語、イタリア語で外国の人たちによって書かれてきた。まだわたしたちに文学がなかったころ、すでにヨーロッパの旅行者、水兵、科学者、商人、冒険者、さらにはスパイたちが、報告書や手紙、物語、回想録などで、アルゼンチンの土地や風景、社会、そしてわたしたちとそれ以外の世界との差異について目録をつくりあげていた。ダーウィンがはじめて進化論を打ち立てたのがガラパゴス諸島――メルヴィルの恐るべき『魔法群島』[3]――だったのなら、彼がその考えをアルゼンチンで成熟させていたと考えてもよいだろう。なぜなら彼の貴重な『航海記』を読むと、ガラパゴス諸島を訪れる前に彼はパンパとアルゼンチンのアンデス山脈にいたことがわかるからである。旅行者の手になる文学は国の成立と同時代にあたる。だから、アルゼンチンの多くの試みと同様に大虐殺とともに失敗に終わるブエノスアイレスの最初の創設は、自分の言葉で証言を残したドイツの船乗りによって語られている。フェリックス・デ・アサーラ [4]、ミヨー[5]、マッカン [6]、ウッドバイン・

ヒンクリフ[7]、トゥールーズ出身の土地測量技師で一八七五年に先住民の侵入を食いとめようと五〇〇キロの濠を掘削する――どこかカフカの「万里の長城」を想わせる試みだ――契約を政府と交わしたアルフレード・エブロー、アルベール・ロンドル、わたしたちのいちばん悪いところさえ偏愛した（ボルヘスもまたそれを美徳と認めたが）比類なきW．H．ハドソン[8]。彼らが、アルゼンチンのイメージや彼らの経験を世界のいろいろな言葉で広めたのだった。ゴンブローヴィッチはそういう伝統が際立つ土地に自らの名を記している。気管支が弱かったことが幸いして、彼はブエノスアイレスのじめじめした気候からしばしば離れざるを得なかったが、おかげでコルドバやタンディル、マル・デル・プラタ、サンティアゴ・デル・エステロといった地域にまつわる貴重すぎるほどの証言を残してくれた。彼の見方は心理学者や社会学者、美学者、さらには政治面の観察者のそれでもあった。彼の発言は単なる思いつきであったり、オリジナリティを求める強迫観念のような意志から生まれた意見であったりはしたが――というより、むしろたぶんそれゆえに――的を得たものになっているのである。『日記』で何度も書いているように、彼はだれよりも貧しく絶望していると感じていた。この事実が、彼が「下方」と呼んでいる粗野な者への嗜好の理由を説明するだろう（この点はもう少し後で戻ることにする）。彼らにエロチックな魅力があるとか、彼らこそが例の未成熟を体現しているといったところで、ゴンブローヴィッチの関心の強さを説明するのに十分ではない。ばかげているように思えるかもしれないが、ゴンブローヴィッチが彼らに抱く親近感は相当強く、これはブエノスアイレスの知的政治的サークルに対してたくらんだ対抗意識のあらわれである。彼は言う、ここでは俗人だけに気品が備わっている、と[9]。ゴンブローヴィッチは執拗に民主主義をののしり、またときにはマゾヒズム（これも彼らしいテーマのひとつだ）を発揮してファシストを自称することもあった。しかしその彼とても、どれほど精神の貴族性を褒め称えたところで、熱を帯びた名もなき肉体こそが人生の不可侵なる尊厳の唯一であるという事実からは逃れられなかった。単なるエロチックな欲望のこととはいえ、社会の持ち主たちがその肉体に依存しているということ、つまり若い血を必要としていることは、本質的に価値を転換させ、社会階層を消滅させる。ゴンブローヴィッチはあちこちで、社会組織はすべて大人による若者への搾取のシステムとして考案されたとほのめかしている。サンティアゴ・デル・エステロをめぐって書かれた個所は、美しさ自体にそなわる自然発生的で潜在的なものを称揚することを通じ、太平洋でゴーギャンが味わった感動を思い出させる。そしてまた、サンティアゴの陽光やタンディルの澄み切って心地よいそよ風、ネコチェアのアメリカ的空間の特異性をはっきりと受け止めている様子もうかがえる。それは地球規模、宇宙規模の印象であり、周囲に無限にひろがる記憶なき現在の感覚なのである。

空虚と砂、波……息が詰まるとも眠気をもよおすとも思える轟音。空間、無限の距離。ぼくの正面には、光輝く髪のような刻みのついた水面。これはオーストラリアまで続いている。南方にはフォークランド諸島とオルカーダス諸島、そして南極。ぼくの背後には内地――ネグロ河、パンパ……　海と空間が耳の奥で、眼前でこだまし、とまどいを引き起こす。ひたすら歩き、ぼくはネコチェアから遠ざかる……ついにその思い出は消えてゆき、遠ざかるという、不断不朽の事実だけが残る。それはまるでぼくに付きそう秘密のようでもある（『アルゼンチン日記』七章 10)。

どんな旅行者もそうであるように、ゴンブローヴィッチの観察の多くも比較に基づいている。しかし何度となく絶対的なるもの、これまで世に出ていない、世界でまだ考えられたことのない要素が明確にあらわれ、彼をそれまでの道からはずれさせ、彼を変え、成長させている。

それは驚くべきことではない。なぜならポーランド時代のゴンブローヴィッチはまだ若く、アルゼンチンで成長したといってまちがいないからである。彼自身がわたしたちに語っているところによれば、ブエノスアイレスに着いてから最初の数年間、彼のいちばんの自慢はその若々しい外見にあり、それが話し相手をとまどわせたという。だから、亡命という暴力的な断絶があったとはいえ、ブエノスアイレス以前と以後の彼のイメージには連続性を認めることができるのである。しかしそれも――彼は『日記』に書き留めているが――悲劇的結末である最初の皺を発見するまでのことである。ゴンブローヴィッチ的な世界の見方において成熟とは、ソフォクレスにとって父殺しがそうであったように、恐るべき精神的外傷（トラウマ）である。ブエノスアイレス以前に書かれた『フェルディドゥルケ』は若者の視点から書かれ、『ポルノグラフィア』は大人の視点で書かれている。彼の傑作のひとつ『トランス＝アトランティック』では語り手は、彼が訪れる社会によって誘惑の対象となることもあれば、主体になることもある。その成熟が語りの視点の数を増やし、ちょうど偉大なる文学の進展にも起きているように、彼の最初の直観とでも言うべきものに体系の複雑さを与え、語りの方法の完成度を高めているのである。彼の文学の進展はアルゼンチンの経験と不可分にあり、その経験が彼の作品の大部分に浸透し、作品の原型となっている。だからその経験を抜きにしては、彼の文学は理解不能のものとなっただろう。ゴンブローヴィッチがほかのポーランド作家、たとえばミウォシュと違うのは、亡命という行為を、西欧との差異を広げ、また培養するための方法として利用したところにあり、こうして彼は自分の視点の独自性を優位に置いたのである。ミウォシュは一九五九年 11、ゴンブローヴィッチをポーランドの現状に気をとめていないと非難したが、そのときゴンブローヴィッチは、ミウォシュはまだポーランド国内の視点で事態を判断していると答えている。ゴンブローヴィッチが〈自分流の視点（ペルスペクティーバ）〉と呼んでいるものをわれわれは外からの眼

と見なすことが可能だが、それは当時のポーランドにのみ向けられたわけではなく、西欧に対しても向けられた。とりわけ、ゴンブローヴィッチ的問題群（プロブレマティカ）の形而上学的内面において彼が〈チャーチル、ピカソ、ロックフェラー、スターリン、アインシュタインども〉と呼ぶような上部社会の、真偽の疑わしい、しかもすでに活力を失った成熟に対しても向けられた。彼によれば、そうした外からの眼が、〈スローガンや理論でつくられた平等よりも、より正しい平等をもたらす〉[12]のである。ゴンブローヴィッチは分析の対象すべてにその視点を適用しているので、いわば普遍化した手法と見ていいだろう。〈オリジナリティを義務として〉追求した結果とはいえ、これもアルゼンチン亡命の産物である。その外からの眼が、アルゼンチン文化が西欧と関係を結ぶときの、あるべき方法であり、ポーランドの未成熟がもっとも力を発揮したときに手にする西欧に対する外在性である。ゴンブローヴィッチはアルゼンチンの世俗世界にもぐりこむことで、東欧からの移住者がよくやるように西欧の〈成熟〉と同化してしまう場合よりも、本来の自分の近くにいた。彼の趣味からすれば、ポーランドからの亡命者は過剰なまでに西欧の視点を装っている――これはのちに東欧からの政治亡命者の多くが犯し続けたあやまちでもある。彼らは、みかけはいちばん無責任に見えるゴンブローヴィッチから学ぶこともできたはずであろう。というのも、ベッドのなかの身を任せる覚悟のできた美女を目の前にして期待に胸を膨らませるのではなく、冷静にいつもと変わらず外からの視点で女を眺め、女の欠点をあれこれと言い連ねるほうがより刺激的なのだから。冷戦のまっただなか、すべてを失ったあとの彼は、西欧のスローガンにならって自分の考えを形作るかわりに、共産主義の問題についてゆっくり時間をとって自分の基準で判断している。そういう彼にわたしたちは驚きをおぼえざるを得ない。冒頭で書いたように、作家であるとき、人はコミュニストでもリベラルでも個人主義者でもなく、また、何かに定まった者ではない。そしてスローガンとか理論は、空辣な抽象でできた不毛な結晶物をただひたすら再生産するだけで、それこそまさしく、芸術家の自由の邪魔をする。こうした視点の急進化はアルゼンチンに来てから生まれたのだが、なぜそれが可能になったかといえば、第一に、彼が自らに課した亡命が西欧の場末という、もといた中欧のポーランドより西欧にははるかに遠い場所に彼を送り出したからだ。そして第二に、彼が行きついたところは、何年も前から同じ問題群（プロブレマティカ）に苦しめられていたから。この移動は言ってみれば幸運な不名誉であった。なぜなら、彼は偶然の風によって運ばれた無名の枯葉から、亡命者の運命という、西欧文化にすっかり同化した他の移住者と比べると、典型とはかけ離れた個別性を付与されることで、世の雨風を耐える人間とはどういうものかを示す記号、模範、象徴になったのだから。未成熟の時代の彼に提示された可能性には、ポスト・ニーチェ世代のヨーロッパ作家になるとか、彼が幾たびも目論んだ実存主義の先駆者になるとか、集産主義の波に脅されて外地でポーランドの伝

統を引き継ぐ聖職者になるとか、あるいは上部社会に住みつく堅物作家になるというのがあった。しかし国威発揚の大西洋航路がきりひらかれたおかげで（オペレッタを書く前のゴンブローヴィッチ的オペレッタとしかいえないものだ）、彼はゴンブローヴィッチになるという、ずっと中身の濃い謎めいた運命に恵まれたのだった。

ゴンブローヴィッチになるというこの特別な事柄が彼にとって幸運であったとするなら、アルゼンチンにとってもそうだった。数年が過ぎるうち、失われた祖国とアルゼンチンは彼にとっては置き換え可能なモデルとして、同じ事例に見えてくるようになった。異なる細部より類似の蓄積のほうが重みをもつものである。ゴンブローヴィッチがポーランド文学について判断を下すとき、そこにはアルゼンチン人がただちに受け入れられる何かがある。いくつかの細かい点を別にすれば、彼の判断はそのままアルゼンチン文学に応用できる。また、ゴンブローヴィッチがしばしば『日記』やインタビューで指摘する核心部分、つまり、反動的傾向をもつ極端なナショナリズムと、ヨーロッパ文学に対するひそかな、もしくは自認したうえでの賞賛とのあいだの葛藤については、彼の指摘はまるごとアルゼンチンに当てはまる。「ポーランドのかわりにアルゼンチンを置いてみるがいい」と、彼はドミニク・ド・ルーに対してはっきり言っている（インタビュー、六十八頁）。未成熟の兆候だとゴンブローヴィッチが難なく同定しているこの葛藤は、両国では歴史的に異なる起源をもっているが、おそらくアルゼンチン文学の主要な緊張をあらわすものであり、十九世紀前半の偉大なる創設テクストの出現以降、その歴史全体を貫く問題である。アルゼンチンの読者は自分たちの文学について本質的なことを、『日記』でポーランド文学に言及するときの彼の判断を読んで学ぶことができる。彼の意見のほうが、アルゼンチンの文学についてわたしたちの国の文学史家が書いた激烈な個所――彼らは、検討しなければならないことに前もって説得させられているふしがある――よりもはるかに本質的である。ヨーロッパ文学に関するこのアンビヴァレンス、地理的な遠さと知的な近さとの混じりあい、拒絶と熱狂の混じりあい、これらはたしかにアルゼンチンの作家の仕事を難しくしているとはいえ、もしゴンブローヴィッチ的態度を、とりわけ外からの眼を引き受けるということになれば、こうした欠点がむしろこれまで議論されたことのない利点をいくつか提示することになろう。ゴンブローヴィッチは言っている。「ヨーロッパの形式の見直しに取り組むなら、超ヨーロッパ的な位置、緊張が緩んでいて不完全な位置からしかありえない。それについては確信めいたものをぼくは抱いている。」（インタビュー、八十二頁）。

ホルヘ・ルイス・ボルヘスは一九六七年、とある席で、それよりさかのぼること二十五年前に「アルゼンチン文学と伝統」という例の講演でアルゼンチン文学全体に適用した考えを、ジョイスにからめて展開しはじめた。ソースタイン・ヴェブレン[13]の『有閑階級論』によると、ユダヤ人が西欧文化の多くの面で刷新することができたのは、よく言われる人

種的な違いによるものではない。ユダヤ人は西欧文化の内にも外にも同時に身を置いているので、西欧文化を刷新するとなれば、ユダヤ人ではない者よりも常にたやすいのである。ボルヘスは同じことを、イギリスに対するアイルランド人たちや、西欧に対するアルゼンチン文化全体に見いだす。「(…) 彼らにとってイギリス文化を革新するには、アイルランド人であることを自覚するだけで十分であったのだ。私は、アルゼンチン人、いや南米の人間は、それとよく似た状況に置かれていると思う。だからわれわれは、迷信にとらわれることもなく、めでたい結果をもたらしうる、そして現にもたらしている一種の不敬でもって、ヨーロッパ的なあらゆる主題を扱うことができるのである」[14]。こうしてヨーロッパかぶれのインテリとポーランド移民は、ほぼ同じ年代にごく近いところで暮らしながら、たがいに相手を黙殺し、もしかするとたがいに憎しみを抱きつつ、ちょうど『トランス＝アトランティック』に出てくる和解不能の決闘者たちのように、自分の仕事に意味を与えるべく、西欧の伝統について同じ戦略を明らかにしていたのである。

これがゴンブローヴィッチとアルゼンチンとのかかわりのもうひとつの面にわたしたちを導いてくれる。つまりボルヘスとの関係だが、もし正確に言うなら、ボルヘスとの間の成立しなかった関係ということになる。二人の間に悲劇的な結末に終わる夕食会や、つかのまの冷ややかな遭遇があったことはよく知られている。この悲劇的な夕食会は、ジョイスとプルーストが一九二二年、シドニー・シフの家で遭遇したときのことを思い出させる。ジョイスによれば、その席でプルーストはもっぱら公爵夫人にのみ関心があり、ジョイスはもっぱら召使にのみ関心があったという。ボルヘスは文学にまつわる人生に関心があるが、ぼくはただ人生にのみ関心がある――ゴンブローヴィッチを個人主義者だとする考えと同じくらい彼を生気論者だとする考えがしつこく残っている――、だからぼくたちはわかりあえない、とゴンブローヴィッチは主張していたが、これはゴンブローヴィッチ自らの執拗な奇行のことを考えるとまちがっている。というのも、ゴンブローヴィッチはアルゼンチンの内陸の都市へ赴くと、ただちにその土地の知識人を招集し、彼らに文学および哲学の試験めいたものを受けさせたのち、ようやくカフェでの彼との同席を許可し、その後は数時間にわたり、彼の講義を聞かせたのだから。ゴンブローヴィッチがボルヘスに対してしばしば振りあげた〈ヨーロッパかぶれ〉という非難は、その用語がヨーロッパ伝来のものならなんでも無批判に支持することを指しているのだから、たいした根拠はない。ボルヘスがヨーロッパかぶれであるというなら――ヴェブレンの描写によれば、同時にヨーロッパの内と外にいると感じること――、ゴンブローヴィッチもそうである。祖先が軍人であることやイギリスに起源があることをいちいち思い出すボルヘスの自慢げな貴族的スノビズムがもしわたしたちになにかを思い出させるなら、それはまさしくゴンブローヴィッチの貴族の気取りであり、彼が自分の家系図を事細かに説明したて、聞き手を

絶望に追い込むその習慣である。逸話レベルの、いま述べたこうした類似は、別のもっと特別な共通点のことを気づかせてくれる。つまり両者には、外からの眼差し以外に――とはいえ、たぶんその結果として生まれてくることだが――挑発行為を好むことや、前衛に対する理論面での不信感、そしてとくに、形式の解体への意志をたやすく見出せるのである。かたやゴンブローヴィッチは未成熟を称揚し、かたやボルヘスはアイデンティティの幻想を執拗に解体する。この二人の師はともにショーペンハウアーであったが、おそらく二人とも彼を出発点にしているのだろう。もうひとつ思わぬ共通点がある。「下方」への興味である。ボルヘスは、勇敢なるものへ崇拝の念を抱き、ナイフ使いの巧みな売春斡旋屋に会うのを好んだり、ならず者たちの決闘のなかに武勲詩の再生を見ようとする傾向があったが、このことは、ゴンブローヴィッチがブエノスアイレスの貧しい区画にいる粗野で無名の若者たちに接近し、自らの根幹となるテーマが息づいているのを見出したのと同じようなことである。たしかに二人は多くの点で異なっている。たとえば一方はどこまでも謙虚であろうとし、一方はどこまでも尊大であろうとした。しかし先にあげた、深いところでの共通点は考慮に値するものばかりである。なぜなら、これらが二人の作品に相互の関連性やアクチュアリティを付与しているからだ。そしてこれらの共通点があるからこそ、ともに厳密な意味で同時代である二人の作品は、わたしたちのところに異なる外観で届くにもかかわらず、同じ強度でわたしたちの心を打つのである。そしてまた――あえて言っておくが――、二人の作品はときにわたしたちを苛立たせ、落胆させるが、それも同じ理由――無理やり捏造したパラドックス、恣意的なわりに頭に残る物の言い方、自己模倣、〈永遠の繰言〉――からなのである。

いずれにしても彼らは二十三年間隣人同士で、同じときにブエノスアイレスの居心地の悪い空気を吸い、めいめいが自分の方法で、はるか片隅から西欧文化と対話していた。ゴンブローヴィッチの『日記』はその対話がもっともあきらかになっているものである。この本の読者のなかには、理由のないことではないとはいえ、自分たちが証人や主人公だった事件や状況の多くが忠実に再現されていないことで不満をもらす人もいるようだ。しかしその非難には見方として誤りがある。ゴンブローヴィッチの『日記』がジッドやトーマス・マン、パヴェーゼと違うのは、作者の内面生活をほとんど書かないところである――その内面生活のある部分については、彼が念入りに隠蔽し、意図的に沈黙し、そして神秘化をはかっている印象を受ける――。しかし、彼の文章がわれわれの関心を惹き起こすのは、それが出来事よりも問題（プロブレマ）を扱っていることにある。フィクションと違い日記は、誠実さの問題を避けて通れない。フィクションはもっぱら真実らしさを求められ、内面的日記には誠実さが期待されている。しかしゴンブローヴィッチの誠実さ、彼の真のオリジナリティは、扱う問題に立ち向かうその方法にある。彼が個人への言及を行うとき、それが

意味のない日常的な出来事をたんに描写したのでない場合、それはすでに問題に、知的論争の例となって書かれている。冒頭に出てくる四連続の〈ぼく〉は、本として出版されるときにわざわざ付け加えられたものだ。あるところでは、つまらないことを細かく書きとめたあと、まるでそれが例外であるかのように、「これはぼくの生活に関心がある人たちのために書いた」と結んでいる。ゴンブローヴィッチの『日記』は内省を目的としているのではなく、分析、熟考、論争を目的とした言い訳（プレテクスト）なのである。

知られているように、『日記』の大半はアルゼンチンで書かれた。わたしにはよくわからない理由によって、『アルゼンチン日記』と呼ばれる選集がブエノスアイレスで数年前に出版されている。『日記』をこのように分解することは、日記がすべてアルゼンチンにまつわるものであることを考えただけでもばかげている。たしかに一部分はヨーロッパに戻った後に書かれ、何十ページにわたりアルゼンチンについて一言も言及がない。とはいえ、『日記』それ自体の存在理由は、アルゼンチンの経験という作者の孤立の特別な状況にある。ゴンブローヴィッチの『日記』は、自らの殻に閉じこもる方法なのではなく、その孤立状況を相手に闘った戦場なのだ。『アルゼンチン日記』という愚かな分裂を望まないのがまず第一にアルゼンチン人であろう。なぜなら西欧文化についてのゴンブローヴィッチの判断がアルゼンチンの文脈で発せられるときに獲得する本質的な反響を感じ取れるのは、ほかならぬアルゼンチン人なのだから。ゴンブローヴィッチ的冒険が交錯するところ、彼の主要な教訓は、理論的相対的な周縁性から真の絶対的な周縁性に彼を導いた運命の誇張にある。その周縁性から彼は人生や題材、不屈の精神を練りあげた。アルゼンチン人であろうとなかろうと、『日記』や『トランス＝アトランティック』を読んだ者は、ゴンブローヴィッチという名の作家の本を読んでいるばかりでなく、アルゼンチンのことを――けっして行間からではなく――読みとることになるだろう。

出典　Juan José Saer, “La perspectiva exterior en la Argentina” from *El concepto de ficción*, Seix Barral, Buenos Aires, 2012, pp.17-30.

訳注

[1] フアン・ホセ・サエール（1937−2005）　アルゼンチンの小説家・詩人。セロディーノ（サンタ・フェ州）生まれ。両親はシリア系移民。1968 年からパリに在住しいくつかの大学で文学を講ずる。1960 年代から作品を発表、小説に、*Nadie, nada, nunca* (1980)、*El entenado* (1983)、*La occasion* (1988、ナダール賞受賞作品)など多数。詩集として *El arte de narra* (1977)がある。

[2] リカルド・ピグリア（1940−）　アルゼンチンの批評家・小説家。小説に、*Respiración Artificial* (1980),

Blanco nocturno (2010, ロムロ・ガジェゴス賞受賞作品)など多数。ゴンブローヴィッチ論として「アルゼンチン小説は存在するのか？」がある（ヴィトルド・ゴンブローヴィッチ『トランス＝アトランティック』国書刊行会所収）。

[3] ハーマン・メルヴィルの *The Piazza Tales* (1856)所収の作品（『メルヴィル中短篇集』八潮出版社に収録）。

[4] フェリックス・デ・アサーラ（1746-1821）　スペインの船乗り・博物学者。著書に、*Viaje a través de La América Meridional de 1781 a 1801* など。

[5] フランシスコ・ミヨー（1728-1805）　*Descripción de la provincia del Río de la Plata* (1772)など。

[6] ウィリアム・マッカン　*Viaje a caballo por las provincias argentinas* など。

[7] ウッドバイン・ヒンクリフ（1825−1882）　ロンドン生まれ。地理学者。*South American Sketches; or a Visit to Rio Janeiro, the Organ Mountains, La Plata and the Parana* (1863)など。

[8] W. H.ハドソン（1841-1922）　イギリスの博物学者・作家。アルゼンチン生まれ。『ラ・プラタの博物学者』など。

[9] Witold Gombrowicz, *Diario argentino*, Sudamericana, Buenos Aires, 1968, p.20.

[10] 初出『クルトゥーラ』1958 年 4 月号（通巻 126 号）。なおサエールは、*Diario argentino* の出典を六章としているが、確認したところ七章の誤り(*Diario argentino*, p.104)。

[11] 1953 年の誤り。

[12] *Diario argentino*, p.126-127.

[13] ソースタイン・ヴェブレン（1857-1929）　アメリカの社会学者、経済学者。

[14] ボルヘス「アルゼンチン文学と伝統」(『論議』、牛島信明訳、国書刊行会所収)。